

会 員 通 信 • News and comments

英文校閲のお知らせ

英文で原稿を作成する際、適当な英文校閲者を探すのに苦労することがあります。魚類学の内容には特殊な用語もあるので、内容を理解してくれる校閲者でないと校閲そのものに不安が残ります。ニュージーランド国立博物館の魚類部門に昨年まで勤務していた Dr. Graham S. Hardy が日本に滞在中で、魚類学関係の原稿の英文校閲をしてくださるそうです。校閲料は、タイプ用紙にダブルスペースで打った原稿一枚分が 1,000 円です。彼は少なくとも数年は、日本に滞在する予定です。英文校閲をご希望の方は、下記へ原稿をお送り下さい。

〒562 大阪府箕面市 3-10-2 松風荘 101

Dr. Graham S. Hardy
(松浦啓一 Keiichi Matsuura)

コペンハーゲン大学動物学博物館、大英博物館
(自然史)、およびモナコ海洋博物館の現状

Report on Some European Natural History Museums

1989年12月から1990年1月にかけて、コペンハーゲン大学動物学博物館 (ZMUC)、大英博物館 (自然史) (BM (NH)), およびモナコの海洋博物館 (MOM) 等、魚類学に関係の深いヨーロッパの自然史系博物館をいくつか訪問する機会があったので、スタッフやコレクション等の現状を報告する。

そもそも今回の訪問は、東京大学海洋研究所の白鳳丸による世界一周の航海にポルトガルの首都リスボンから乗船することになったのが発端となった。またちょうどその航海に乗船が決定した頃、ZMUCのDr. J. Nielsenとの共同研究が始まったこと、そして以前から手紙のやりとりをしていたMr. N. R. Merrettがイギリスの海洋科学研究所 (IOS) からBM (NH)に移ったことが重なりあって、研究の打ち合わせ、標本のチェック、そして長い伝統を誇るヨーロッパの自然史系博物館の視察を兼ねた訪問を行うことになった。

第一の目的地ZMUCでは、初日に中・深層性魚類の分類の大御所、当年とって77歳のDr. E. Bertelsenが出迎えてくれた。当日は本来の仕事相手であるDr. Nielsenの都合が悪く、かわりに彼が出迎えてくれたのである。その日は彼の部屋で(彼自身の作品であるチョウチンアンコウ類の置物がところ狭しと並んでいる)3時間ほどビールを飲みながら深海魚談議をしたあと、筆者が現在

集めている南大洋産のオニハダカのサンプルをDANAやGALATHEAのコレクションの中から探し出すのを御大が自ら手伝ってくれた。標本庫を我が庭とばかりに歩き回られる姿や、オリジナルな発想に満ちた話の内容、そして最近立て続けに出された一連の論文からはとても77歳とは思えない。さらに驚くべきことに、なんと2年前にはソ連の調査船による研究航海にも乗船されたとのことである。もちろんDr. Bertelsenは7年前にデンマークの研究職の定年である70歳で退官しており、現在は小さなペンションルームと呼ばれる専用のオフィスを与えられて研究に励んでいるのである。

滞在2日目からはDr. Nielsenを相手に相模湾に出現したParabrotulidae科魚類の未記載種について議論・検討し、合い間の昼食やお茶の時間などに博物館の現状について伺った。

現在ZMUCには研究スタッフが25人、テクニシャンが50人いるが、10年ほど前の「黄金時代」にはもっといたそうである。魚類部門には常勤研究者としてDr. Nielsen (ZMUCに来て既に22年になり、数年前まで館長だったそうである)が活躍されており、またDr. Bertelsenも引退後連日博物館に通って研究を続けておられる。また、標本管理を専門とする常勤のテクニシャンが1人週3日(残りの2日は鳥類を担当)、さらに週20時間の秘書が1人いて、研究のサポートをしている。この4人の役割分担は徹底しており、そのおかげで研究効率が実によいのが印象的であった。ZMUCと手紙のやりとりや標本の借出をやられたことのある方はお気づきかと思うが、あの対応の素早さはこの4人のチームワークによるところ大なのである。

ZMUCには、デンマークの魚類は当然のことながら、リンネの弟子であるForsskålによって記載された19世紀の剥製の模式標本や、有名なDANA, THOR, GALATHEA号等による探検航海によって世界各地から収集された標本等が保管されている。剥製標本は魚類部門専用の図書室の専用棚に保管されており、液浸標本は350m²ほどの標本庫2室に設置された固定式中量ラックに保管されている。液浸標本は同定され、登録の済んだものはすべてエチルアルコールで保存されており、模式標本類、デンマークの魚類、その他の地域の魚類、各探検航海で採集された魚類等のカテゴリーにしたがって配置されていた。さらにそれぞれのカテゴリー内では科の分類体系(BergとReganをミックスしたもの)にしたがって並べられ、ロット単位の標本には、科番号(2桁)に連

番を加えていった番号(桁数不定)がラベルによってつけられていた。また、標本瓶は属ごとに深さ5cmほどの定形の本箱内に並べられ、標本の検索・整理等の便宜をはかっている。標本庫の整理はすばらしく、これは明らかに有能なテクニシャンの存在によるところが大きい。当然のことながら、研究者が勝手に標本を出すことはできても、それを勝手に戻すことが出来ないのは図書館と同じである。標本の管理に関してはテクニシャンが絶大な権限を有しており、誇りをもって仕事をしている。また、標本の梱包や発送、それに関わる手続きはすべてテクニシャンが行っている。

彼ら研究者のオフィスで特徴的なのは、手元にはよほど頻繁に使う文献しか置いていないことである。2人の著名な魚類学者のもとに届く膨大な文献別刷は、魚類部門専用の図書室に著者のアルファベット順に並べられ、重複したものは(大部分のものが重複している)別の棚に置かれ、訪問した研究者が必要なものを持ち帰れるシステムになっている。日本人魚類学者による論文も多数含まれており、中には田中茂穂先生や松原喜代松先生の旧姓時代の別刷なども重複したもののなかにみられた。筆者もこのシステムの恩恵に与り、今までどうしても見つからなかった論文のオリジナルのいくつかを入手することができた。

以前にもこの欄でDr. Nielsenが述べていたように、DANA REPORTが入手できるのは今回のセールが最後である。現在世界各国からまとまった注文がかなりあり、ものによっては残部があとわずかになっているとのことであった。すでに注文されていた方は倉庫に名札とともに積み上げられていたのいずれ発送されることになるであろう。入手希望の方は早めに注文されることをお勧めする。

最終日にはDr. BertelsenとDr. Nielsenが小さな「さよならパーティー」を開いてくれた。筆者が博物館の研究者としての今後の研究構想を話したところ、親身になって相談ののってくれて、全面的に協力してくれることになった。それにしても、滞在中オフィスにかかってきた電話は皆無に近く、落ちついた静かな環境の中で彼らは9時半から5時までみっちり研究に没頭していた。日本では考えられないことであり、うらやましいかぎりであった。

第2の目的地BM(NH)は昨年になってスタッフが大きく変わった。ご存じの方も多いと思うが、高名なDr. H. W. GreenwoodとDr. A. Wheelerが退官し、Dr. P. J. P. Whiteheadが博物館を去ってから、魚類部門の主任の後任として海洋科学研究所(IOUS)から底生深海性魚類

を専門とするMr. N. R. Merrettが昨年5月に、またスミソニアンでpost-doctoralをやっていたDr. D. Siebert(コイ目魚類の分類)が同10月にそれぞれ赴任してきた。したがって現在BM(NH)の魚類部門にはresearch staffとしてMr. Merrett(主任)、Mr. Gordon Howes(淡水魚の分類)、Dr. Siebertの3人と、Mr. Jim Chambers(collection manager)を中心とした4人のcuratorの計7人が働いている。(ちなみにcuratorはイギリスでは純粹に標本の世話をする人という意味で使われている。それに相当すると筆者が勘違いしていたkeeperという肩書きはかなり位が高く、BM(NH)ではDepartment of Zoologyの主任などしかつけられない。)そのほかにも、つい最近アメリカ自然史博物館からバリの国立自然史博物館に移られたDr. Dingerkusが客員研究員として博物館に来ていたし、Dr. Greenwoodはまだオフィスを構えており、冬に長期間アフリカに行く以外はいつも博物館に来ていそうである。

BM(NH)ではMr. Merrettと共同研究の打ち合わせや深海魚の四方山話をしたあと、research staffとしてはもっとも在籍期間の長いMr. Howesに手伝ってもらって筆者の必要としている南大洋のオニハダカの標本を捜してもらった。他の2人のresearch staffは赴任間もないため博物館の事情にまだあまり通じてないらしく、不明な点があるとすべて彼のお世話にならなくてはならなかった。Mr. Howesによれば現在はようやく魚類部門のスタッフがそろって体制が整いつつあるが、それまではすべての仕事が彼のところに舞い込んできて大変だったとのこと。あるときなどは標本に関する問い合わせだけで週に30通もの手紙がきてすべて彼が対応したそうである。現在でも彼とMr. Chambersが中心となって標本に関する仕事が進められており、筆者の滞在中彼らが標本の貸出や管理についてしばしば話し合っているのを見かけた。

魚類の標本は、廊下をはさんでオフィスの反対側にある“Spirit Building”と称する液浸標本庫に保管されている。ビルディングとはいっても別棟になっているわけではなくオフィスとはつながっている。標本庫ではエチルアルコールを使用しているため防火対策をとっているとのことであったが、はっきりとは確認できなかった。現在16ある液浸標本庫のうち魚類は7つを占めており、各標本庫には中2階がつくられ上下が区切られていた。標本はNormanの“Draft synopsis...”で決められた属の順番にしたがってたいへんきれいに並べられている。また大量の骨格標本が標本庫の1フロアを使って保管されており、あらゆる魚類の骨格がすぐ観察できるよう

になっている。とくに最近では考古学者が頻繁に訪れ、観察していくそうである。またシクリッドフィッシュを中心とする淡水魚の透明骨格標本を製作する作業が現在進行中で、大量の標本が棚に並べられていた。標本庫は一見狭いようにみえるが、四方の壁に木製の観音開きの戸がついた棚が組み込まれ、部屋の中央にも同様の棚が並んでいるため、予想以上に収容能力があるようである。標本庫に特有の臭気はほとんど感じられなかった。標本庫の棚の全長は4.5 kmにも達するとかで、現在そこにはおよそ250万個体の標本が収蔵され、標本の貸出・返却は年間およそ1,500件にも及ぶようである。

これとは別に、大型の剥製標本や骨格標本はオフィスからかなり離れた展示室の下にある標本庫に収蔵されている。ゾウやキリンの巨大な骨格標本などとともにずらっと並んでいる魚類の剥製や骨格標本は見るものを圧倒する。全長2 mはあろうかというマンボウのなかまの完模式標本(剥製)が壁にさりげなく立てかけてあったのには驚いた。

筆者が到着した日がクリスマス休暇が始まる直前であったため、十分な滞在期間はとれなかったが、BM (NH) でいちばん印象的だったのはスタッフの皆が皆、予算が無い予算が無いとぼやいていたことであった。設備の老朽化が目立ち、機器の更新もうまくいっているようにはみえなかった。今まで入館無料が1つの宣伝文句であったBM (NH) もつい最近2.5ポンド(約700円)もの入館料をとるようになってしまったのも、博物館の自主独立経営をめざしてのことなのだろうが、これでは観光客しか来ない博物館になってしまわないだろうか。世界的な傾向なのだろうか残念なことである。

第3の訪問地モナコの海洋博物館(MOM)には、初期の海洋学の発展に多大な貢献をしたAlbert 1世が自分の調査船を用いて集めた大西洋や地中海の、とくに深海性魚類の標本が多数収蔵されていることで知られている。Collett, Zugmayer, Roule, Angel等が書いた一連の“Resultats des Campagnes Scientifiques...”で会員の方もよくご存じかと思われる。本来はこの博物館を訪問する予定はなかったのだが、たまたまリスボンの次の寄港地がモナコであり、白鳳丸乗船の研究者が博物館主催のレセプションに招待されたため、その翌日あらためて出かけ、話を伺うことにした。

残念ながら現在MOMには魚類学者もいないし、研究者もまったくいない展示と標本保管専門の博物館になっ

ている。わずかにcollection managerに相当するDr. C. Carpineが標本や資料の世話をしているにすぎない。彼は実に親切にいろいろなことをしてくれるのだが、筆者が現在進めている未記載種の模式属がここに収蔵されているはずでそれは見られるのかの問いに、魚類標本に関しては収蔵庫の整理が行き届いていないせいか、ついにきちんとした答えは返ってこなかった。ただし、彼に問い合わせることにより標本の貸出などは可能だそうである。また、模式標本や一連のレポートにみられる石版画のもととなった標本が、日光のさしこむ展示室に陳列されているなど、標本にとっては不幸な状態がまかりとおっていることから、あの貴重な標本がいつまで研究に耐えられるか不安である。ひとつ喜ばしいことは、図書関係の管理がたいへんうまくいっているらしく、いまだに石版画の美しい正確な図がついた前記の“Resultats des Campagnes Scientifiques...”が一部入手できることである。問い合わせは下記のMrs. Carpineあてに申し込めば、資料を送ってくれるとのことである。

今回の一連の訪問は、駆出しの博物館研究者である筆者にとって、本場の自然史研究の精神とでもいうべきものを実感できた点で大きな収穫であった。また、標本の維持・管理に対する健全な思想がすみずみまで行き渡っているのを目の当たりにして、改めて日本もこうあらねばと思った。しかし非常に気になったのは、他人ごとではあるが、ヨーロッパの博物館における魚類分類学の世代交代が今後どのように行われるかということであった。デンマークは大御所が2人もいるわけだが、それ以外には1人もいない。もちろん職もないのであるが、Dr. Nielsenは自分が退官するであろう日までには、後継者を育てなくてはならないと言っていた。イギリスでもすでに自国からの魚類分類学者の供給が途絶えていることは、アメリカから若手研究者をスタッフとして招いたことから明らかであろう。MOMのように、すでに研究的側面をすっぱり切ってしまう、日本的な展示博物館になってしまったところもある。他人ごとながらヨーロッパの魚類分類学の将来が気がかりである。

末筆であるが、今回の滞在中お世話になった博物館の大勢の研究者やスタッフに深甚なる謝意を表す。

MOMの出版物購入の申し込み先: Mrs. Jacqueline Carpine-Lancre, Musée Oceanographique, Avenue Saint-Martin, Monaco-Ville, MC 98000, MONACO

(宮 正樹 Masaki Miya)